

# Wuthering Heights 論

東 義 郎

## I

David Cecil はその名著 *Early Victorian Novelists* (1934) の中で 次のように述べている、「『嵐が丘』——その名前だけでも想像力をかき立てるに十分だ。われわれはロンドンの街頭でその名が言われるのを聞くことがあるかもしれない。すると錯綜した往来の轟音と人々のざわめきは一瞬消え失せて静けさが訪れる。騒音の代りに耳は勢よく流れる川の水音、雷鳴のとどろき、そしてヒースの荒野をわたる風のうなりに満たされるように思われる。……ヴィクトリア朝の小説の中で唯『嵐が丘』のみが時の塵を少しも留めていない。」<sup>註1</sup>

Cecil のこの、特に最後の言葉の当否はさておいて、Emily Brontë の *Wuthering Heights* (1847) は次第に世に知られて、今では余りにも有名な小説となったことは事実である。しかしそれにも拘らず一般読者のこの作に関する意見の凡てが一致するわけではない。無限の賛嘆を惜しまぬ人々が一方にあるかと思えば、他方には現在猶悪魔の書として退ける人々も居る。真に優れたものは万人の愛するところとなる、またそうなるべきことを信ずるわれわれは、そこでこの作品を改めてとり上げ、研究する必要を認めたのであった。

*Wuthering Heights* の主題は人間執念の極とも思える、すさまじい男女間の愛であることは明白だが、問題は作者がこの主題を如何に表現し、如何なる美的効果をあげているか、である。換言すればこの作品はわれわれを感動させるか否かであり、もし感動を与え、永続的な喜びを与えるとすれば、それは何故かを究明することである。

愚見によれば *Wuthering Heights* は世界文学中第一級に属するとは到底

認めがたいが、それにしても読むに値する傑作である。以下においてその論証を試みることにする。

## II

*Wuthering Heights* は Heathcliff と Catherine の愛を中心とする物語であるが、それは Ellen Dean という田舎の中年で常識に富む女が、気が弱いが多少 ironic な Lockwood という都会の青年に語る形式になっている。この形式はこの作を成功させた一つの要因である。何故ならばこの二人はその物語とは正に対照的な日常の世界を代表する人物であって、この非現実的な話にいわば現実という枠をはめこむからである。かくてこの物語は伝説めいた趣を帯び、われわれは何の心配もなく明々と燃える焔火を囲みながら、恐しい伝説や昔話に耳を傾けている、というような立場に置かれる。

ところで伝説や神話においては、人物は砂漠にそびえるピラミッドのように良い意味で抽象化され、明確で力強い線で描かれる。またそこでは人間の夢や希望が反映していることが多い。この小説の主人公もこのような伝説的世界の魅力を幾分有している。

都会から遠く離れた英国北部の田舎、そこに広大な土地を有する Linton 一家が代々住んでおり、そこから約四マイル隔たった丘の上の、*Wuthering Heights* と呼ばれている家に Earnshaw 家の人々が居る。Ellen が語るのはこの近くの村とも殆ど関係を持たない両家の三代にわたる愛と憎しみの物語である。

この作の伝説的要素は当然人物と筋の展開に最も著しく認められるが、ここでは特に主人公の一人、Heathcliff について述べることにする。Heathcliff は執念の鬼と化して冷酷無残の印象を与える男だが、本来不屈の精神を有し、心の気高さすらも認められないわけではない。Virginia Woolf も「Heathcliff という人物はとてもあり得ないと言われるが、文学に現れた如何なる少年も彼以上に生氣にあふれてはいない。」<sup>註2</sup>と言っている。Heathcliff の持つ積極的価値の内在する面は見逃してはならないと思われる。彼は様々の不利な条件を克服して生きてゆく、一つのたくましい人間像を示していると言い得る。次の文は

Heathcliff を訪問した Lockwood の観察を述べたものであるが、Wuthering Heights の単なる外面描写に止らず、その主人である Heathcliff の性格を暗示している。

Wuthering Heights is the name of Mr. Heathcliff's dwelling. "Wuthering" being a significant provincial adjective, descriptive of the atmospheric tumult to which its station is exposed in stormy weather. Pure bracing ventilation they must have up there at all times, indeed: one may guess the power of the north wind flowing over the edge, by the excessive slant of a few stunted firs at the end of the house; and by a range of gaunt thorns all stretching their limbs one way, as if craving alms of the sun. Happily, the architect had foresight to build it strong: the narrow windows are deeply set in the wall, and the corners defended with large jutting stones.

（ワザリング・ハイツ<sup>註3</sup>というのはヒースクリフ氏の家の名前である。「ワザリング」は意味のあるこの地方の形容詞であって、その家が位置の関係上嵐の時にさらされる大気の騒音を表わしている。本当にそこではいつも空気は清く、さわやかで風通しがいいに違いない。家の端の方にある二・三本のいじけた樅の木がおそろしく傾いていることによって、またあたかも太陽に施しを乞うているかのように凡てが一方に枝を伸ばしている、ひよろ長い一列のサンザシによって、がけを越えて流れこんで来る北風の強さがわかる。幸いにしてその家を建てた者にはそれを頭丈に造るだけの先見の明があった。せまい窓は壁の中に深くくぼみ、角は大きな突出した石で守られていた。）

「嵐」，「強い北風」，「さわやかな風通し」，「いじけた樅の木やひよろ長いサンザシ」，「せまい窓」，「厚い壁」，「大きな角の石」，これらのイメージは単なる外面描写の位置に止らず、気候風土も含めた様々な悪条件にも屈せず、毅然として立つ Heathcliff の象徴の含みを有している。

彼は London から拾われて来て Earnshaw 家の子供たちと一緒に育てられ

たが、少年時代から驚くべき忍耐力を示した。Hindley が家長となるや教育も与えられず無知野蛮の状態に陥り、やがて Catherine の求愛者 Linton が現れるようになるとどことも知れず姿を消す。

数年後、彼は眼を見張るような変化成長を遂げて再び登場する。しかし生来の野性は変わらず、誰よりも彼を知っている Catherine は次のように言う。

“ . . . Tell her what Heathcliff is : an unreclaimed creature, without refinement, without cultivation : an arid wilderness of furze and whinstone. I'd as soon put that little canary into the park on a winter's day, as recommend you to bestow your heart on him ! . . . Pray don't imagine that he conceals depths of benevolence and affection beneath a stern exterior! he's not a rough diamond——a pearl-containing oyster of a rustic : he's a fierce, pitiless, wolfish man, . . . ”

註4

（「ヒースクリフがどんな人か教えてあげなさい。あの人は上品さもなければ教養もなく、改めようのない人間なのです。ハリエニシダと玄武岩の乾ききった荒野のような男です。あの人に愛を捧げるようにとあなたに勧めることは、あのかわいいカナリヤを冬の庭に放してやるようなものです。……きびしい表面の下に深い慈悲心や愛情をかくしているということなどはどうか考えないで下さい。磨かれないダイヤモンドではないのです。内に真珠を抱いた貝のような田舎者ではありません。荒々しい、情容赦ない、狼のような男です。」）

これは Heathcliff に心を寄せる Isabella に対する Catherine の忠告であるが、「ハリエニシダと玄武岩の荒野」と「冬の庭に放たれるカナリヤ」のイメージは Heathcliff の性格及び Isabella との関係を巧みに示している。

さて Heathcliff は確かに狼のような無慈悲な男であって正に悪鬼の如き振舞をする。それだけならば何の魅力もないが、彼には冷静で皮肉なところもあり、人間味もないわけではなく、  
註5 註6 勿論狂気の人でもなければ怪物でもない。彼

はむしろ男性的で不屈の意志を有し、生命力の横溢した人物である。彼がこの作の中では冬や嵐の象徴の含みを持っていることは後でまた論じるが、彼と Catherine は Walter Allen の云う如く、いわば「凡ゆる地勢状況から考えて当然合流すると判断されたが、ある特別な不自然な事情によりそれが妨げられた二つの河」である。彼のより激しく、また Linton という逃げ道もない愛情の河はかくて逆流し、行く手を遮る凡てを破壊する力となった。Heathcliff と Catherine は最後に結ばれるが、その時われわれは何か大自然の秩序が回復した、というような感を抱くのである。

### III

次にこの小説の美的価値を創造する上において、前章において述べた伝説的要素以上に大きな貢献をする、自然と人間の融合の要素について論じることにする。

*Wuthering Heights* には Emily Brontë が深く愛した英国 Yorkshire の土地の靈気がこもっているような感をわれわれは受けるが、このような点でその中から Mississippi 河の精霊が立ち昇って来るかに思われる、あのアメリカ文学の古典、*The Adventures of Huckleberry Finn* (1884) とかなり共通するものがある。

Heathcliff には既に述べたように嵐や冬の象徴と感じられる面があるが、冬の嵐やイメージが逆に彼の内面を暗示する場合も少くない。Catherine は Heathcliff とは対照的に若々しい生命の躍動する、楽しい夏を表わすような人物であって、作品全体を明るい方向に引き上げる役割を果たす。次に引用する文の中の「迫り来る夜の闇」や「荒れ狂う風と雪」のイメージは荒涼たる冬景色を眼前に浮び上らせるばかりでなく、Catherine 亡き後の Heathcliff の心情をわれわれに伝える力を持っている。文中「私」というのは *Wuthering Heights* を訪れた Lockwood である。

I approached a window to examine the weather. A sorrowful sight I saw : dark night coming down prematurely, and sky and hills mingled in one

bitter whirl of wind and suffocating snow.

註8

（私は天気をしらべるために窓に近ずいた。それは悲しい光景だった。夜の闇は早くも迫り、空と丘は荒れ狂う風と雪に包まれて見分けがつかなかった。）

Catherine については、「どんな婦人もキャサリンのように感じたり、行動したりすることは出来ないと、いわれるが、それにも拘らずキャサリンは英国の小説中最も愛すべき婦人である。」と Virginia Woolf は *The Common Reader* (1957) の中で述べているが、この言葉にはかなりの真実性を認め得る註9ようにわれわれは思う。以下の文章においては、鳥歌い、草木の緑濃く、自然界のすべてに生気みなぎる、美しい夏の如き Catherine が描出されている。文中「私」というのは Ellen である。

Certainly, she had ways with her such as I never saw a child take up before ; and she put all of us past our patience fifty times and oftener in a day : from the hour she came downstairs till the hour she went to bed, we had not a minute's security that she wouldn't be in mischief. Her spirits were always at highwater mark, her tongue always going—singing, laughing, and plaguing everybody who would not do the same. A wild, wicked slip she was—but she had the boniest eye, the sweetest smile, and lightest foot in the parish ; and after all she meant no harm ; for when once she made you cry in good earnest, it seldom happened that she would not keep you company, and oblige you to be quiet that you might comfort her.

註10

（たしかにあの子にはどんな子供にもかつて見たことがなかったようなところがありました。あの子のために私たちはみんな一日に五十回以上も我慢しきれなくなって腹を立てるのです。下に降りて来た時から寝る時まで、いたずらしやしないかと一瞬も油断出来ないのです。いつも元気いっぱい、舌は休む間なく動き、歌ったり、笑ったり、同じようなことをしない者をうる

さく困らしたりしました。いたずらで手に負えない、ひよろ長い女の子でした。でも教区一番の生き生きして美しい眼とかわいしい笑顔を持ち、足どりも一番軽やかでした。そして結局は何の悪気もなかったのです。というのは本当に人を泣かせると、大抵あの子はそばを離れず、自分をみじめな思いにさせてくれるな、としきりになだめてくれるからでした。)

次に引く文章は Heathcliff と Edgar の争いのために精神錯乱しかかっている Catherine の叫びであるが、ヒースの荒野を愛する心がよく示されている。

“ . . . Oh, I'm burning! I wish I were out of doors! I wish I were a girl again, half savage and hardy, and free ; and laughing at injuries, not maddening under them! . . . I'm sure I should be myself were I once among the heather on those hills. . . . ”

註11

(「ああ、私は燃えてしまいそうです！ 外に出たい！ ずいぶん野蛮で、無鉄砲で、自由だった、そして不当な扱いを受けても頭に血がのぼったりせず平気だった、あの子供の頃に戻りたい！ . . . 一度でもあの丘のヒースの中に行けたなら、きっと元通りになるでしょう。」)

二代目の Catherine はおだやかな Edgar の血を引いて、その母親ほどに激しい気性ではない。しかし生気に満ちた愛すべき自然児である点では全く同じである。次に引用する部分は若い娘に成長した二代目 Catherine が、いとこの Linton と自分の考えた暑い六月を最も 楽しく過す方法を Ellen に対して説明するところであるが、これはこの小説の最後の静かな墓場の見事な叙景に劣らぬ、極めて美しい文章である。

. . . He said the pleasantest manner of spending a hot July day was lying from morning till evening on a bank of heath in the middle of the moors, with the bees humming dreamily about among the bloom, and the larks

singing high up overhead, and the blue sky and bright sun shining steadily and cloudlessly. That was his most perfect idea of heaven's happiness : mine was rocking in a rustling green tree, with a sweet wind blowing, and bright white clouds flitting rapidly above; and not only larks, but throstles, and blackbirds, and linets, and cuckoos pouring out music on every side, and the moors seen at a distance, broken into cool dusky dells ; but close by great swells of long grass undulating in waves to the breeze ; and woods and sounding water, and the whole world awake and wild with joy. He wanted all to lie in an ecstasy of peace; I wanted all to sparkle and dance in a glorious jubilee.

（暑い六月の一日を過すあの人の一番楽しい方法は、朝から晩まで、蜜蜂が花の間で夢を誘うようにぶんぶんうなり、ひばりが空高く頭の上でさえずり、青い空には雲一つなく、太陽が照り輝いている荒野の真中のヒースの土手に横になっていることでした。それがあの人の考えた最も完全な天国の幸福でした。私の方法はさらさらと音を立てる緑の葉におおわれた木に登ってそれをゆすぶることでした。そこではさわやかな風が吹き、きらきら輝く白い雲が頭の上を早く流れ、ひばりだけでなく、うたつぐみやくろどり、かっこうも四方で歌を歌っているのです。遠くに涼しく薄暗い小さな谷に区切られている荒野が見え、近くでは長い草が大きな波のように風にゆれています。そして森や小川、いや全世界が眠りから覚めてはげしい喜びに夢中になっているのです。あの人はすべてが恍惚とさせる平和の中にあることを望み、私はすべてがすばらしい喜びの中にあって輝き踊るのを望みました。）

以上の引用文によっても知られる如く、この作においては人物と自然が分ちがたく融合し、自然は人間を、人間は自然を具象的に説明するのである。要するに Heathcliff は冬の嵐の如く無慈悲であり、Catherine は夏の野の如くさわやかである。彼等の心はまたヒースの丘の如く不変であり、その愛情は電光の如く激烈である。



#### IV

この作の魅力に貢献するわれわれの見逃し得ない第三の要素は、寂滅為樂、輪廻転生の宗教的思想である。Ellen Dean と Lockwood が物語の現実的な枠となつて外から支えているのに対し、この宗教的要素は作品全体をいわば内側から支えている。この要素は別な言葉で言えば作中に表現された作者の宇宙観であつて、愛と憎しみの地獄絵に大いなる救いをもたらすものである。Lawrence Hanson は「エミリにとっては死は終りでもなければ初めでもなく単に形を変えることであり、人間の本質の解放なのである。そして彼女はしばしばそのような信念を詩に表現している。」と述べているが、<sup>註13</sup> Emily Brontë のこのような宗教的思想は *Wuthering Heights* にも明らかに看取される。

次の文は Catherine が死んだ時の Ellen の感慨であるが、そこに示されている人間の永生を信じる心、また寂滅為樂の心境は少くとも G. Eliot や Conrad の小説には見出されぬものであつて、Emily Brontë の精神の深さを思わせる。

I don't know if it be a peculiarity in me, but I am seldom otherwise than happy while watching in the chamber of death, should no frenzied or despairing mourner share the duty with me. I see a repose that neither earth nor hell can break, and I feel an assurance of the endless and shadowless hereafter — the Eternity they have entered — where life is boundless in its duration, and love in its sympathy, and joy in its fullness.

<sup>註14</sup>  
(私だけ特別なかも知れませんが、悲しんで狂気のようになった、あるいは絶望的になった人がそばにいないければ私は、亡くなった人のいる部屋でお通夜をしている時は大抵楽しいのです。私はこの世も地獄も乱すことの出来ない静けさを感じ、果てしのない、影のない未来——死者の入って行った永遠の未来——生命には終りなく、同情は愛より無限に流れ、喜びも限りない未来を確信するのです。)

このような永遠の未来に対する信仰は人物及び筋の展開によって暗示されている輪廻転生の思想と共に、(というのは Hareton は Heathcliff の, Catherine Linton は Catherine Earnshaw の新版ともいうべき人物であるからであるが) この作に特殊な静けさと深さを与えている。Catherine の霊は死後も Heathcliff につきまとい、彼もその霊と一体化することを一途に願って、遂には肉体の拘束を脱してその目的を遂げるのであるが、この話もそれ故に奇怪で信ずべからざる超自然的な事件とは殆ど感じられず、むしろ当然の帰結として受け取られる。

この小説は Lockwood が Heathcliff の死後、Wuthering Heights を訪問し、Hareton と二代目 Catherine の幸福な姿を眺め、それから Heathcliff, Catherine そして Edgar の三人の墓のあたりを徘徊するところで終っているが、以下の文によって知られる如く、そこではこの宗教的要素の生み出す平和と静寂、大いなる調和の雰囲気は極点に達している。

I lingered round them, under that benign sky; watched the moths fluttering among the heath and bluebells, listened to the soft wind breathing through the grass, and wondered how any one could ever imagine unquiet slumbers for the sleepers in that quiet earth.

註15

(私はおだやかな空の下、そのあたりを逍遙した。ヒースやヒアシンスの間をひらひら飛んでいる蛾を眺め、草を分けて吹いて来る微かな風に聞き入った。そしてそのように静かな土の中で眠っている者にどうして不安な眠りなどあり得ようか、と思った。)

## V

われわれはこの小説の魅力を生む三つの要素についてこれまで述べて来たのであるが、これらの要素を統一するものは勿論 Heathcliff と Catherine の愛であり、これが作品全体を貫く主題である。以下においてこの主題がどのようにこの三つの要素に関係し、統合して、全体効果を高めているかを、物語の筋

を追わず、唯作中人物の言葉を直接引用することによって幾分でも示したいと思う。

Catherine は Heathcliff を愛する心を Ellen に次の様に言う。

“ . . . If all else perished and he remained, I should still continue to be ; and if all else remained, and he were annihilated, the universe would turn to a mighty stranger : I should not seem a part of it. My love for Linton is like the foliage in the woods : time will change it, I'm well aware, as winter changes the trees. My love for Heathcliff resembles the eternal rocks beneath : a source of little visible delight, but necessary. Nelly, I am Heathcliff ! He's always, always in my mind : not as a pleasure, any more than I am always a pleasure to myself, but as my own being. . . . ”

註16

(「もし他のすべてが死んでしまっても彼が残っていれば、私は依然生き続けることになるのです。そしてもし他のすべてが残っていても彼がいなければ、世界は私と全く何の関係もないものとなり、私はその一部だとは思われなくなるでしょう。私のリントンに対する愛は森の群葉のようなものです。冬になると木が変るようにそれは時がたつと変ることはよく知っています。私のヒースクリフに対する愛は土の中の永遠に変らぬ岩のようなものです。眼を喜ばすようなものではなくありますが、必要なものです。ネリイ、私はヒースクリフなのです。彼はいつも、いつも私の心の中にいるのです。私自身が自分にいつも喜びであるわけではないと同様、喜びとしてではなく、私自身の命として。 . . . 」)

ここでは「森の群葉」、「永遠に変らぬ岩」、「冬」などの自然のイメージを用いて Catherine の Edgar に対する愛と Heathcliff に対する愛の相違を示している。Catherine の愛には その烈しさにも拘らず、清らかで性的感情は殆ど認められず、それは「潮を月に引きつけ、鉄を磁石に引きつける力」の如きものであることは、「私はヒースクリフなのです。」という言葉によって特に絶妙に

註17

表現されている。愛情が力強い線で描かれている点で、主題が伝説的要素と関係していると言えよう。また Heathcliff が生きている限り、自分もたとえ死んでも依然生き続ける、という言葉は人間の永生を暗示し、宗教的要素とつながるものである。更に自然のイメージを用いたことは少くとも間接的に主題を自然と人間の融合の要素に近ずける。

Heathcliff の方でも次のように彼の Catherine に対する愛と Edgar の Catherine に対する愛の相違を Ellen に向って説明する。

“And there you see the distinctions between our feelings: had he been in my place, and I in his, though I hate him with a hatred that turned my life to gall, I never would have raised a hand against him. . . . I never would have banished him from her society as long as she desired his. The moment her regard ceased, I would have torn his heart out, and drunk his blood! But, till then——if you don’t believe me, you don’t know me——till then, I would have died by inches before I touched a single hair of his head!”

註17

（「われわれの気持の違いがそれでわかるだろう。もし彼が私の立場にあり、私が彼の立場にあったなら、たとえ私の人生を毒に変えてしまうほどの憎しみを彼に抱いていたにしても、彼に手を上げるようなことは決してしなかったことだろう。 . . . 彼女が彼のいることを望む限り、決して彼を追払うようなことはしなかっただろう。彼女の愛が消えたら最後、忽ち彼の胸を引き裂き、その血を啜ってやる／ だがそれまでは——もしお前さんが私の言葉を信じないなら、私という人間を知らないんだ——それまでは彼の髪の毛一本にだって触れようとは思わない。それくらいなら一寸刻みに殺される方がまだ増した。）」

Heathcliff の Catherine に対する愛は全く私心のない、たとえ地獄の苦しみを味わっても Catherine の心に従うという無条件の愛であって、愛の一典型を示し、人間の理想を反映するが故に伝説的要素と結びつく。また胸を引き裂い

て血を騒ぐという兇暴な言葉は非情な冬の荒野を吹きまくる嵐を想起させ、自然と人間の融合の要素に接近する。

## VI

われわれはこの作の芸術品としての価値を明らかにするための方法として、その魅力を生む三つの要素をとり出してそれぞれに光を当て、次いでこれらの要素を統一する主題に論及した。かくてわれわれに残された問題は、この小説は全体としては如何なる効果を与えるか、ということである。しかしその前に言葉の芸術としての小説の基盤ともいべき形式と文体の問題について多少論じなければならないが、これについては Cecil や Allen が既に卓説を述べているので簡単に触れるに止める。

<sup>註18</sup>  
*Wuthering Heights* の形式もかなりすぐれたもので、この点では Emily Brontë は英国小説史上すぐれた技巧家である Austen や Conrad, また Henry James 等に匹敵するものである。その主な特徴は Conrad の場合と同じように第一に物語の世界は常識的で現実的な人物の眼を通して眺められ、語られることである。第二も Conrad と同じく、物語を述べるに当って時の普通の順序を追わず、最も印象的な場面をまず持ち出し、次いで過去へとさかのぼるという方法である。Emily Brontë の場合注目すべきことは、その上釣合いの感覚も働いていたことである。すなわち物語はいわば二つの出発点を持つが一回目は作中の世界が混乱の極にある時、具体的に言えば Lockwood が *Wuthering Heights* の Heathcliff を訪問するところである。その二回目の出発点は同じく Lockwood が何年か後再び *Wuthering Heights* を訪問し、Haretonと二代目 Catherine とが幸福に結ばれて、世界が完全な調和の中にあるのを眺める時である。

文体については Cecil は「*Wuthering Heights* においては日常のありふれた語が用いられているが、それは Emily Brontë の強烈、清新、そして堅実な想像力によってこの上なく力強い、同時にこの上なく精巧な道具となっている。」と述べ、また「文章のリズムはその意味、感情と完全に調和し、英文学

における驚異の一つである。』<sup>註19</sup>と言っている。Cecil のこの言葉は全体に対して  
ばどうかと思われるが、部分的には確かに当てはまるようである。

## VII

*Wuthering Heights* は出版されてからも、しばらく世に認められなかった。昔の批評家の多くは Heathcliff に代表される非人間的要素に反感を抱き、中には「これは残忍で不愉快な悪魔の書であり、地獄の世界の話である。ただ場所や人物が英国的な名前をつけられているに過ぎない。」<sup>註20</sup>と言った人すらあった。また今日においても猶この作の価値を殆ど認めようとはしない人もいる。すべてこのようなことには相当な理由があると思われる。というのはわれわれはこの小説を読む時、Heathcliff の陰惨な復讐にかなりの必然性を認めるにしても、その暗い話は余りにも全体から見て占める割合が大き過ぎ、単調で退屈な効果をもたらすものである、という感をしばしば抱かざるを得ないからである。更に Heathcliff と Catherine の愛は余りに抽象的に描かれて実感に乏しく、作者が強引にどこまでも二人を結びつけようとしている、という印象すら時に与えられる。そこでわれわれは先に言及した *The Adventures of Huckleberry Finn* の場合とは異なり、最高の賛辞をこの作には贈り得ない。

しかし *Wuthering Heights* を読了する時、われわれの心にこの作の全体を象徴するイメージとして永く留まるものは、人間としてそれ以上を望み得ぬほど互いに深く結び合わされた、野性的な二人の少年と少女の姿である。それは暗く、きびしい冬を連想させる憎しみに燃えた Heathcliff と狂乱の Catherine のイメージを背景に、ヒースの茂る野や丘を一日中走りまわって遊んでいる、永遠に若い少年と少女の鮮かなイメージである。この二つのイメージは重なり合って二重写しのようにわれわれの心に浮ぶのであるが、後者の明るさは前者の暗さによって強調される。光の強さは影の濃さによって知られ、嵐の後の静寂ほど身にしみて感じられるものはない。それ故この小説の中の暗黒の部分、すなわち悪鬼の如き Heathcliff の復讐とそれによってもたらされた数々の不幸な事件にもその存在理由はある程度認められる。要するにこの作の全体効果はかな

りすぐれたものであり、それは愛の一典型と人間の大地に対する素朴な喜びとを非凡な筆で表現した一傑作であることは疑いないことである。

- 註 1. David Cecil : *Early Victorian Novelists*, (Pelican Books.), 1948, p.115.  
2. Virginia Woolf : *The Common Reader* (First Series), Hogarth, 1957, p.203.  
3. Emily Brontë : *Wuthering Heights*, Kenkyusha, 1923, p.2.  
4. *Ibid.*, p.115.  
5. *Ibid.*, p.170.  
6. *Ibid.*, p.189.  
7. Walter Allen : *The English Novel*, New York, 1955, p.225.  
8. *Wuthering Heights*, p.14.  
9. Woolf : *op.cit.*, p.203.  
10. *Wuthering Heights*, p.45.  
11. *Ibid.*, p.142.  
12. *Ibid.*, p.280.  
13. Lawrence Hanson : *The Four Brontës*, Oxford, 1950, p.232.  
14. *Wuthering Heights*, p.187.  
15. *Ibid.*, p.383.  
16. *Ibid.*, pp.91~92.  
17. *Ibid.*, p.169.  
18. Cf. Cecil : pp.144~146. Allen : p.223.  
19. Cecil : *op.cit.*, p.149.  
20. Cf. Muriel Spark : *Emily Brontë*, Peter Owen, 1960, p.232.